

戦国時代を語る上で外せない地・岐阜県。多くの城跡や武将の生きざまを感じられる史跡が数多く残されていることから、戦国観光には最適です。くしくも新型コロナウイルス感染症の影響で、「近場」「屋外」「ふらっと行ける」旅がちょうど良い昨今。この機会に、地元の魅力を、岐阜新聞女子ネットのメンバーらと「再発見」してみませんか。



2022年度
第16回 垂井町編

れとりっふ

trip

山頂の本曲輪からは濃尾平野が一望できます。

菩提山城跡



関ヶ原の戦いや半兵衛を語る上で絶対を外せない激アツの地・垂井町

垂井町観光協会が発行している観光マップの表紙の「垂井抜きに関ヶ原合戦は語れない」という目を引く文字。戦国ファンの中には、この言葉に「その通り」と大きく頷いた方も多いでしょう。

垂井町は関ヶ原町の東に隣接していることから戦い当日には複数の武将が布陣。南宮山(419m)には西軍の毛利秀元・吉川広家ら約3万の兵が控えていました。合図を受けて秀元は進軍しようとしたが、先陣を任されていた広家は東軍と密約を交わしていたことから応じませんでした。秀元からみて広家は20歳近く離れた従兄にあたることから強く出られず、南宮山の上にも陣を敷いていた長束正家、安国寺恵瓊、長宗我部盛親も進軍できませんでした。秀元は再三の出撃要請に対し、兵が弁当を食べているという理由で時間を稼ぎ、戦わなかったと言われとして語り継がれています。

そして西軍がたった一日で敗れてしまったことはご存じの通り。もし西軍の3万の兵が参戦できていたら…。結果は大きく変わっていたかもしれません。

とにかく規模が大きい!



敵の侵入を阻止する急で大がかりな堅堀。



本曲輪

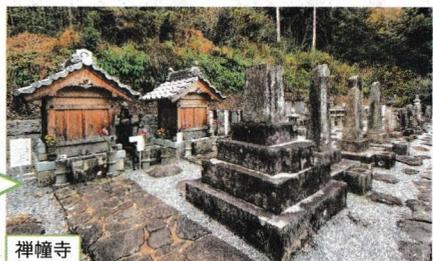
垂井町の戦国の歴史を語る上で、垂井町岩手に居城し、豊臣秀吉に仕

えた名軍師・竹中半兵衛も外せません。同じく秀吉に仕えた黒田官兵衛とともに「二兵衛」「両兵衛」と称され活躍しました。半兵衛は1544年、美濃国大御堂城(現在の大野町)生まれ。1558年に父・重元とともに垂井町岩手地区で勢力を誇っていた岩手弾正を攻略したのを機に岩手に移りました。

翌年、菩提山(402m)にもともとあった城をベースに、重元は南北約300m、東西150m、堅堀や高低差の大きい堀切を複雑に組み合わせた全国屈指の規模を誇る城を築きました。近江国境という場所柄、強固な山城が必要だったので推測されています。城ができてほどなくして重元が没したため、半兵衛が城主となりました。

半兵衛は、難攻不落といわれた稲葉山城(岐阜城)をわずか16人で乗っ取りました。それが織田信長の耳に入り、家臣の秀吉に迎え入れられました。以後、姉川の戦い、小谷城攻め、長篠の戦いなどで活躍するも、1579年に36歳の若さで病死しました。半兵衛は、戦いに集中するためにあえて貧相な馬に乗ったり、「戦わずして

竹中家のお墓がずらり。一番左の屋根根のあるのが半兵衛のお墓です。



禅幢寺

勝つこと」を心掛けたり、民衆の心や暮らしの安定に常に気を回していたこと、官兵衛との熱い友情などさまざまな逸話が残されており、それが故に半兵衛にとっぴりはまる戦国ファンは多数です。

半兵衛の子・重門も秀吉に仕え、小牧・長久手の戦いや慶長の役に参戦しました。竹中家の領地内で行われた関ヶ原の戦いでは、当初、西軍に属していましたが東軍に転じ、旧知の仲の官兵衛の子・長政と協力して大功を立てました。戦いの後は麓の竹中氏陣屋を拠点にしました。

竹中氏陣屋跡は白壁の櫓門、水堀、石垣の一部が現存しています。櫓門をくぐることはできませんが、門をくぐって数m先からは岩手小学校の敷地ですので奥に進むことはできません。竹中氏陣屋跡には竹中半兵衛像が、その400mほど北には竹中氏と家臣の菩提寺・禅幢寺があり、重元や半兵衛らの墓があります。そしてその先には菩提山城跡に続くハイキングコースの入口が。コースは4つあり、山頂までの距離は1310〜2036mと日ごろ鍛えていなければなかなかハードですが、本曲輪から見る景色は格別です。

全国の旗本陣屋の内、唯一現存する城郭建造物で、歴史価値が非常に高いのがポイント!



竹中氏陣屋跡・半兵衛像と櫓門